

広島市小社研会報

令和2年4月・5月・6月・7月 第262号

研究主題

社会をみつめ、未来を問い続ける社会科教育の創造
—教材の意味からせまる授業づくりを通して—

小学校学習指導要領完全実施の新年度が始まっています。一方で新型コロナウイルス感染症の影響により、年間指導計画やシラバス、日々の学習内容の再検討、変更等多くの作業で、先生方はお忙しくしておられることと思います。大変お疲れ様です。社会科においては、第3学年から地図帳の指導が位置づけられたり、第3学年と第4学年の目標と内容が分けて示されていたりするなど大きな変更点もあり、子どもたちに社会的な見方や考え方を育むため、小学校学習指導要領解説にあらためて目を通し、学習指導要領改訂の趣旨をこの機に今一度捉え直してみる必要もあるでしょう。

今年12月に開催予定でした「第57回広島県小学校社会科教育研究大会」は、残念ながら中止となりました。先行き不透明な状況が続きますが、大会の成功に向けて取り組んできた運営、研究の成果をぜひ今年度の研究行事・事業計画に生かしていきましょう。

今年度のスタートにあたって（新会長あいさつ）

市小社研会長 矢賀小学校長 原 徹

本年度、社会科部会会長を務めさせていただくことになりました矢賀小学校の原です。どうぞよろしくお願いいたします。私は、会長でもあり、県大会の会場校の校長でもあります。会長というよりは、会場校長としての思いが強いかもしれませんが、お許しいただければと思います。

先生方におかれましては、新型コロナウイルス感染拡大による臨時休業、休業中の児童の受け入れ、課題づくり、学校再開に向けての準備等で日々お忙しくされていたことと思います。6月1日より、学校が再開しましたが、感染拡大を防止するために様々な準備、環境づくりをして授業を進めなくてはならず、大変ご苦勞をされている

ことでしょう。

このような状況の中、今年度の県大会、夏期研修会は、中止せざるを得なくなりました。これまでを振り返ってみますと、昨年度は、市小社研に県大会のための実行委員会を立ち上げていただきました。また、研究部の先生方には、矢賀小学校での指導案検討会、授業研究会に参加していただき、多くのアドバイスをいただきました。さらに、広島大学大学院の木村先生にはお忙しい中、5回も指導していただきました。

「社会的な見方・考え方を働かせるとは具体的にどのような児童の姿を指すのか」「深い学びとはどのような姿なのか」等について、多くのご示唆をいただきました。

このようにたくさんの方々に応援していただき、矢賀小学校の教職員は12月に向けて頑張っていこうという気持ちでおりましたが、このような結果になり残念に思っております。

県大会は中止となりましたが、矢賀小学校では、昨年度取り組んだ内容と今年度の取り組みをまとめ、研究報告として県内の各小学校に配布していきたいと考えています。

今年度の取り組みについては、授業時数の確保、学習活動の重点化、指導計画の見直し等の作業が必要なこと、ペアや班で意見を出し合ったり、検討したりする活動が難しいこと等多くの課題があります。矢賀小学校では、このような実態に合わせて、1時間1時間の授業を深い学びに近づけるために教科書（デジタル教科書）を最大限に活用することを実践しています。そのために、毎時間の板書計画を作成し、子どもたちの問うことは何か、調べさせることは何か、考えさせることは何か、そのためにはどのような資料が必要なのか等を教師が意識して授業を進めることができるようにしています。この取り組みについても報告書に掲載することで、市内の先生方が社会科学習を進める上で1つの手助けになればと考えています。

今後の市小社研の活動について、現段階で具体的にお示しできるものはございません。今は、先生方それぞれが目目の前の子どもたちにしっかりと向き合っただけ教育活動を進めていかれることが一番であると思います。現在の状況が、急激に改善することはあまり期待できませんが、近い将来に市小社研の先生方が集まって研究を進めることができるよう願っています。

「第57回広島県小学校社会科教育研究大会」に向けて、会場校の矢賀小学校は市小社研と連携をとりながら研究を進めてきました。昨年度も校内全体研修会(授業研究)を4回実施しています。

残念ながら大会は中止となりましたが、授業者の先生方の感想を中学年、高学年と二回に分けて掲載いたします。会場校の矢賀小学校及び市小社研一丸となって取り組んだこれまでの成果を、ぜひ広島市の子どもたちの学びに生かしていきましょう。

3 学年「はたらく人とわたしたちの暮らし」

広島市立矢賀小学校 教諭 久保 咲奈

今回の授業を終えて学んだことは大きく二つあります。

一つ目は、「地域教材の開発」の大切さを実感できたことです。本単元では、広島市での野菜づくりの特徴である「葉野菜」の生産について学習した後、地域の生産者である飯田氏の野菜づくりに焦点を当てて学習を進めました。本校の児童は、2年生のときに、「矢賀ちしゃ」「矢賀うり」の栽培体験を、飯田氏の指導のもと行っています。そんな子どもたちにとって身近な存在である飯田氏の野菜づくりを学ぶことは、子どもたちが意欲的に学ぶきっかけとなったように思います。また、飯田氏の野菜づくりの特徴は、農薬を使わない無農薬野菜の栽培であり、広島県が認証する「安心！広島ブランド」のことで、無農薬での野菜づくりの難しさや、安心・安全な野菜づくりをするためには、多くの工夫や努力をする必要があることなどを子どもたちは自分で感じることができていました。これまで本校に様々な場面で関わってくださった飯田氏や、「矢賀ちしゃ」「矢賀うり」を社会科の教材として活用したのは今回が初めてでしたが、実際に授業を終えてみて、授業者自身も新たな発見を多くすることができ、子どもたちにとっても授業者にとっても、多くのことを学ぶきっかけとなったように感じています。また、今回地域教材の開発をしてみて、資料集めが不十分であったことや、単元の構成が甘かったことなどの課題に気付くこともできました。自分の足で調べることは、時間も労力もかかりとても大変でした。しかし、調べていく中で、「子どもたちにどのような姿になってもらいたいのか」といった授業に対する思いも生まれ、調査を進めることが楽しいと感じることもできました。だからこそ、教師が色々なことを調べることを今後も大切にしていきたいと思います。

二つ目は、それぞれの立場の人々の関係性を捉えることの重要性です。本時では、「生産者」、「消費者」、「役所の人」のそれぞれの立場から「矢賀ちしゃ」の魅力を考える活動を行いました。

しかし、実際の授業では、魅力を整理していく中で、誰の立場からの魅力なのかを整理できずそれぞれの関係性について上手く理解させることができませんでした。また、本来であれば関わることのない「役所の人々」の関係性について資料から読み取ったり、実際に話を聞いたりする場面がなく、その部分について上手く理解させることができず、何のために役所の人々が「矢賀ちしゃ」の生産に関わっているのかを子どもたちに理解させることが上手くできなかつたように思います。今回の失敗から、授業者側がそれぞれの関係性について理解しておくことの重要性を改めて感じました。本時を迎えるまでの段階で単元構成を変えたことで、情報収集が不十分のまま授業が進んでしまっている場面もありました。そのため、子どもたちにそれぞれの立場を理解させることが不十分となってしまったように思います。子どもたちに関係性を捉えさせる上でも、しっかりとした情報収集を行い整理することを今後は心がけていきたいです。

4 学年「残したいもの、伝えたいもの」

広島市立矢賀小学校 教諭 福岡 渉

本単元では、矢賀の秋祭りで担がれる巨大神輿「ちょうさい」を題材として取り上げ、地域に残されてきた伝統文化は、様々な工夫や努力をしながら受け継がれていることを理解させるだけでなく、矢賀の町のよさに気付かせ、矢賀の町を大切にしたいという思いを持たせることをねらいとして単元を構成しました。色々な地域で「ちょうさい」が廃止される現状があるにも関わらず、矢賀の「ちょうさい」は何度も廃止の危機を乗り越え、受け継がれてきた事実から、「なぜ矢賀の町では『ちょうさい』を残し続けているのだろう。」という疑問を見出し、学習課題を設定しました。中には、今単元の学習を始めるまで「ちょうさい」の存在を知らない子どももいましたが、地域の方にインタビューをしたり、実際に見せてもらい担ぎ棒を持たせてもらったりしたことで、「ちょうさい」に対する興味が沸き、「もっと知りたい。」「もっと調べたい。」という意欲を引き出すことができたように思います。しかし、「ちょうさい」に焦点を当てすぎてしまったため、「残したいもの」と「伝えたいもの」の違いを捉えさせたり、秋祭りの意義について考えさせたりすることができなかつたことについては、課題が残りました。

今回の授業をしてみて学んだことは、「教材研究の大切さ」です。授業をするうえで、地域の方に何度もお話を伺ったり、様々な文献から資料を集めたりなど、とても大変だったことが印象に残っていますが、色々な情報が集まれば集まるほど、自分自身が「ちょうさい」に大きな魅力を持つようになりました。しかし、今回の授業では、「ちょうさい」の魅力について考えさせたり、「ちょうさい」を残そうとしている人々の工夫や努力に気付かせたりする方法が映像を見たり、授業者から伝えたりするだけで終わってしまい、子どもたちが資料をもとに思考をする時間を十分に確保できなかったように思います。そのため、学習が児童の予想だけで進んでしまうことも多く、深まっていく場面をうまく設定できていませんでした。それはやはり、「ちょうさい」の情報が足りなかつたり、自分自身の考えが上手くまとまっていなかつたりしたことで、どのように「ちょうさい」を学ばせれば良いのかという明確な答えを見出せないまま授業を進めていってしまったことが考えられ、教材研究不足を痛感しました。

授業を終えて、ご指導をくださった木村先生からは、「自分が分からないと思ったことを納得するまで追及する姿」を教師がお手本となって示していくことが大切であるということを教えていただきました。また、研究部の方々に助言をいただいたり、同好会に参加をしたりしたことで、一つの授業を作るためにとことん追求をしている先生方の姿も多く学ぶことができました。今回初めて教材開発を行ってみて大変なこともたくさんありましたが、自分自身が「ちょうさい」をもっと知りたいと思えるようになったり、地域の方々との交流を通して矢賀の町を良くしたいという強い思いに触れたりすることができたことは、とても大きな経験になったと思います。自分自身が様々なことに疑問を持ち、追及していく姿勢をこれからも忘れずにいたいと思います。

令和2年度 広島市小社研 役員一覧

会 長	原 徹 (矢賀)
事務局長	樋口 恒充 (瀬野)
研究部長	佐藤 健 (楽々園)
事務局次長	三好 崇之 (五日市中央)
幹事長	岡本 典久 (伴)
副幹事長	松崎 浩尚 (幟町)
庶務幹事	寺本 美代子 (竹屋) 中塩 聖香 (矢野) 櫛川 尚 (古田台) 市位 和生 (みどり坂) 中野 靖弘 (亀山) 神岡 賢史 (高須) 沼尻 理恵 (五日市観音西)

	1ブロック	2ブロック	3ブロック	4ブロック
ブロック会長	二宮 孝司 (広瀬)	新田 典生 (牛田新町)	楠橋 千鶴 (美鈴が丘)	宗像 直子 (安東)
代表世話係	大和 千尋 (宇品東)	原紺 政雄 (亀山南)	佐渡 宏行 (五日市)	吉田 嗣教 (長束)
ブロック幹事長	江頭 佳佑 (みどり坂)	溝本 真未 (可部)	安本 顕馬 (五日市観音)	吉田 敬士郎 (春日野)

※各ブロックの各学年代表幹事は未定です。

県の行事

- ① 県小社研夏期研修会(市小社研夏季研修会と合同開催)
令和2年8月18日(火) 広島市総合福祉センター ⇒中止
- ② 第57回広島県小学校社会科教育研究大会
令和2年12月3日(木) 広島市立矢賀小学校 ⇒中止

研究行事・事業計画

- 令和2年5月14日(木) 第1回研究会・全体会 ⇒中止
- 8月18日(火) 市小社研夏季研修会(県小社研夏季研修会と合同開催) ⇒中止
- 10月15日(木) 第2回研究会(ブロック別研究会) ⇒未定
- 令和3年1月14日(木) 第3回研究会(ブロック別研究会) ⇒未定

【あしがき】

このたび、瀬野小学校樋口校長先生の後を引き継ぎ、五日市中央小学校の三好が会報の担当をさせていただくことになりました。気持ちを新たに、皆様とともに学び、広島市の子どもたちのために活動していくことができたらと思っています。先の見えない状況が続いておりますが、本会報により各会員の皆様、また社会科OBの先生方に「広島社会科」の研究の様子や全国や県の社会科をめぐる動向など、さまざまな情報をお伝えできればと考えております。

皆様のご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

広島市小社研事務局次長 三好 崇之